

十周年合同句集

水無月

水無月句会

水
無
月

序

浜 田 桐 花

このたび水無月句会が発足十周年を記念し、合同句集「水無月」を刊行することとなりました。このことは水無月句会の各位にとつて誠に慶びに堪えないところと存じます。

水無月句会は平成七年に五周年を記念し、合同句集を発刊しました。その後も会員各位が俳句による自己表現を目指し、毎日の生活を大切に、心豊かに生きることを願つて、研鑽を重ねてまいりました。その成果としての珠玉の作品をここに取纏めることとなつたのですが、発足以来の会員に加え新しく入会された方々も同じ意志をもつて参加され、配列も五十音順としたところに意義あるものと存じます。特に十周年を迎える喜びを共にすることなく入定された方々の作品も編集委員の方々のお骨折りによつて収録出来ましたことは、私達現会員はもとより故人各位もさぞかしお喜びのことと存じます。

本句集を契機にさらに会員の輪が益々堅く、また裾野を大きく広げつつ、久喜市俳句連盟の発展に寄与されますことを願うものでございます。

最後に句集刊行にあたり、原稿の取纏め・整理・編集にご尽力頂いた編集委員の皆様へ深く感謝申し上げます。

遠	里	薫	夕	春	信	大	春	五	消	序
赤	神				濃	花		厘	され	
城	楽	風	桜	秋	路	野	雪	銭	し村	

沢	小	木	金	岡	大	大	今	石	浜	浜
田	林	島	子	安	井	沢	村	川	田	田
末	伸	喜	ふ	京	貞	君	能	久	桐	桐
彦	江	志子	み子	子	信	予	子	代	花	花
74	66	58	50	44	36	28	20	12	4	1

年	月	日	おのが影	傘寿	寡黙	金木犀	棟梁	五月の色	旅路	題字	住所録	あとがき
意		蝕										
.....												
武井文江	田辺五月	玉川悠	高橋三酔	高橋カツ子	高橋涼月	坪井邦子	二瓶邦枝	丸山菁	本橋美千子	玉川悠		
82	90	98	106	114	120	128	136	144	152	160	162	

消されし村

浜田 桐花

従来の俳句は、人間が自然を詠うという花鳥諷詠の世界であつた。今は人間は自然の中の一民族であり、自然によつて生かされているという俳句を作りたいと念じている。

桑若葉消されし村の役場跡

村消され百年を這う蛇苺

正造翁遺言の村の蛇苺

萬延と指で読む墓柳絮降る

谷中湖に雲湧き五月の三角波

久女には遠き妻居るさくらんぼ

蓮捲葉愚直のいのち動きだす

尺獲の測れぬ二十世紀の傷

大股の女触れゆく葱坊主

朝顔を咲かせる腕のいくさ傷

広島へ発ちたる蟬の穴暗し

無言館十五の夏の吾が手足

巻脚半に仮名ふる資料館の夏

もう一人の自分に出逢った終戦日

大足の影が縮まる三尺寝

三伏の灯を絶つ地下の荒格子

奈落の水滴る地下の大本営

ハングル文字の碑が灼けている地下壕口

雲よりも遠き師となり十三夜

秋霖雨梁に一揆の刀傷

稽田を本音で歩き若くなる

蜂起百年鐘が波打ち冬に入る

男七十トラトラトラの十二月

指の傷疼きて十二月八日

御慶かな艶のもどりし妻の爪

人日の陽に透く自戒の生命線

蔵開き小さな嘘のはじまりぬ

足跡の空しさ雪の百日忌

父の顔また母の顔花八ツ手

何時の世も無謀ないくさ野火走る

草萌の卵塔昭和の一円玉

キューポラを継ぐ眉太し芽木の空

早春譜雨にドレミの梓川

花種に方三尺の土均らす

春泥を来し出女の手形石

五厘錢

石川久代

子供達も巢立ち無味の暮しをしていた或る時、家族の一言「好きな事を何でも」に揺れ動きました。「無」からの私が今日あるのは佳き師よき友との出逢いでした。これからは、日常身辺顕微鏡で見詰めつつ人生のパートナーとして行きたいものです。

水盤の水取り換へる三日かな

初縫ひの寿の文字明日ひらく

風の出て成人式の裾乱す

恐竜の骨となりたる滝氷柱

忘れもの探す納戸の余寒かな

初蝶に似合ふ衣を仕立てけり

筍を掘る足許の震度三

走り根にうかと躓く花疲れ

見上げたる空の穴あく若葉風

同行二人杖に身を乗せ札所道

揉んで揉んで針の光の新茶かな

父の日や定価五銭の農事メモ

蒼天や肋のおどるプールの子

甚平の臍出してゐる肩車

三行の日記したため短夜や